様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１２０
研究課題名（和文）　楽器におけるわざ学の伝承とグローバリゼーション
研究課題名（英文）　Globalization and Oral Transmission of Musical Instrument Construction and Modification Techniques
研究代表者
田中多佳子（TANAKA TAKAKO）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：７０３４６１１２

研究成果の概要（和文）：楽器というモノに込められたわざ学、すなわち意匠と具体的変容の過程に着目してさまざまな角度から観察・分析することによって、今まさに音楽に生じつつある西洋対非西洋および伝統文化と現代化のせめぎあいと伝播と変容の具体的諸現象を確認し、可能な限り資料化し公開した。主な研究成果としては、(1)日本の大正琴とその異形たるアジアの楽器群に関する研究、(2)インドのリードオルガンとその異形に関する研究、(3)ヨーロッパの楽器学と楽器制作の現状に関する研究、(4)19 世紀末のインド楽器をめぐる東西交流史に関する研究があげられる。

研究成果の概要（英文）：Focusing on design and specific modification processes, looked at and analyzed from various viewpoints, investigation into construction techniques involving musical instruments confirms and documents in concrete terms the varied phenomena of transformation, diffusion and the growing conflict in between Western and non-Western music and between traditional culture and modernization. In the main, the research reports on (1) the Japanese “Taisho-goto” (a button-manipulated zither invented in 1912) and variants of the like in Asian, (2) Indian reed organs and variants of the like, (3) the current status of academic study and construction techniques of musical instruments in Europe, and (4) the history of east-west exchange concerning Indian instruments of the late 19th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学　芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：楽器　わざ学　グローバリゼーション　音楽学　大正琴

１．研究開始当初の背景

楽器に関する近代的研究は、19 世紀後半以降の進化論的あるいは体系的分類学に始まり、20 世紀以降は特定の楽器に焦点を当てた歴史的・音楽学的・音響学的・音楽教育学的・社会学的な研究など角度を広げ、さまざまな研究が行われ蓄積も少しずつ増えてきた。本研究の研究代表者および研究分担者は、音楽学の立場から、何らかの楽器関連研究を行なってきたが、全てが演奏者あるいは聞き手側からのアプローチであった。

本研究の着眼点は、楽器が演奏者や聞き手

からの美的価値観に応じた多様な音楽表現上の要求だけではなく、それを理解し具体的にそれを実現させようとする楽器製作者のさまざまなものつくりの技(わざ)が込められた具体的形状を持つモノとして存在している点にあった。しかし、そうした音楽のソフトウェアとハードウェアとしての楽器の両義性に着目した研究は少なく、範囲や対象は限定されていた。

「わざ学」は、山口修大阪大学教授(当時)代表の「わざ学プロジェクト」(1995-1997)によって「文化を「もの・こと・からだ・こころ」を主要な契機として人間が展開するものと定義し、それらをつなぐ何かを「わざ」として捉える新たな学問領域」として提唱された概念であるが、特に楽器に限定的な研究ではなかった。「ものづくり」の重要性が見直される中、2000年7月開催の『第3回アジア職人文化専門家国際会議』では音楽がテーマとしてとりあげられたが例があるが、継続的な研究に続くものではなかった。アジア・太平洋地域音楽教材共同製作事業専門家会議(ACCU)の成果『アジア・太平洋の楽器』(藤井知昭・小柴はるみ監修、1994)は本研究のアプローチに添う部分が見られたが、各地域の報告の質や視点に一貫性がなく、今日では映像の質や情報の鮮度にも問題があった。

２．研究の目的

演奏家の意図する音楽はそれを実現可能にする楽器がなければ存在しない。楽器は、弾き手(や聴き手)の論理と作り手の論理、モノとしての制約とのせめぎあいの上に成ってある音楽を実現させる。つまり、音楽的な欲求はそれに答えて楽器を作る職人のものつくりの技(わざ)があって初めて現実のものとなる。本研究は、音楽を支えてきたそうした楽器づくりのわざ学の今昔に焦点を当てた音楽学的楽器研究であり、消滅しつつあるさまざまなわざを記録し、今音楽に起こりつつある伝播や変容の過程を、楽器の観察から読み取ることを目指した。

対象地域は、日本を含むユーラシア大陸の各地に広げ、モノとしての楽器の変容や動きを、複数地域で並行して調査し、楽器の時間的・空間的な伝播や変容のプロセスをグローバルに把握することを目指した。

(3)研究によって得られた情報や成果は本研究のメンバーで共有することはもちろん、可能な限り資料化し、Web 上に公開して研究・教育関係者の利用に供することを目指した。

３．研究の方法

(1)現地調査

ユーラシア大陸の東端の日本、周辺アジア諸国およびこれらの地域の音楽に大きな影響を及ぼし続けてきた西端のヨーロッパ諸国―すなわちイギリス、ドイツをはじめとするヨーロッパ諸国、インドネシア、インド、台湾および日本国内―各地で、当該地域の研究担当者が中心となって個別に事例研究を進めた。具体的には、楽器博物館・楽器コレクション・楽器店などの視察、楽器に関する資料・情報収集、楽器制作現場の観察や記録、楽器制作者へのインタヴューなどを行った。研究対象としての楽器は、各々の地域の代表的な伝統楽器に限定せず、従来、研究対象としてあまり注目されて来なかった周辺の楽器―いわゆる「Ｂ級楽器」、代用楽器、電子楽器、外来楽器など―にまで、その範囲を拡大した。

(2)研究会開催とメーリングリストの活用

打ち合わせ・報告のための全５回の対面の研究会のほか、メーリングリスト上で頻繁に情報・意見交換を行った。メンバーはそれらを踏まえ共通の問題意識を持って各フィールドで調査を行い、調査結果を持ち寄り報告し合い議論するということを繰り返しながら研究を進めた。このようなプロセスを経ることにより、各々が観察した具体的事象が、当該地域・当該楽器固有のものか、複数地域に見られる現象か、相互の影響関係はあるのか等について情報交換と確認を行い、さらなる課題意識を持って個々の事例についての考察を深めた。

(3)資料化と情報公開

Web サイトを作成し、研究全体の進捗状況と共に、調査で得られた情報を著作権や肖像権・個人情報保護などの観点から可能な範囲で逐次資料化し、メンバーが共有しつつ一般公開して外部の意見も求めた。さらに本研究に関連して収集した楽器は、京都教育大学内に開設された「まなびの森ミュージアム」に保管・展示・公開することになった。

(4)新聞閲覧調査

台湾の大正琴に関する情報を得るために、国会図書館所蔵の大正初期の『台湾日日新報』の記述内容調査を行った。

４．研究成果

本研究の成果は、主に次の４点に集約されよう。

(1) 大正琴とその異形楽器に関する研究

大正琴は、大正元年(1912 年)に名古屋出身の森田吾郎(本名:川口仁三郎)によって考案された、日本生まれの洋楽器第Ⅰ号である。邦楽器の二弦琴に、タイプライターのキーを鍵盤のようにとりつけたもので、日本の楽器にはない金属弦の音色と演奏の簡便さ、安価であることなどにより人気を博した。戦前までインド、スリランカ、中国などアジア諸国にも盛んに輸出され、一時期は政府の「重要輸出品目」にも指定されていた。日本の大正琴については、一人金子が詳細な研究を行ってきたが、アジア各地で散見される大正琴の改良楽器については、見るべき研究はなかった。本研究により多くの事例が初めて明らかになった。

①日本の大正琴

金子による詳細な研究が既にあったが、本研究では、金子はさらに大正琴の制作過程について詳細な記録を行い、動画資料「大正琴の製造過程とわざ」にまとめ Web 上に公開した。調査および動画資料製作にあたっては、ふそう楽器（愛知県丹羽郡大口町）および浜松楽器博物館館員、梅田徹氏の協力を得た。

②台湾の大正琴(中山琴)

尾高が中心となって研究を行った。通説では 1920 年代初頭に日本の大正琴が台湾に伝わったとされる。日本植民地下の代表的日刊紙「台湾日日新報」調査からは有力な手がかりを得ることはできなかったものの、このことは邦人・台湾人を問わず知識層が大正琴に関心を持たなかったことの反証とも考えられる。現地調査やその後の研究から、他地域と異なる次のような状況が明らかとなった。すなわち、1940-1970 年代には台湾でも大正琴が流行したと見られるが、経済発展と反比例するかたちで衰退した。1989 年 11 月日本の大正琴団体の台湾訪問を機に、日台親善交流活動を通じて復活をとげたが、大きな流行にはいたらず、2010 年の調査時には、高齢者や地域の生涯学習科目として細々と生き残っている状況が観察された。

③インドの大正琴(バンジョーbanjo)

田中は塚原と共に 2004 年に訪れたムンバイ在住の一人の楽器職人のもとを再び訪れ、インタヴューを行い、演奏法についての教授を受け、その動画資料も作成した。田中は、演奏法・教授法の詳細な分析から、日本から来た安価な玩具が、高価な伝統楽器シタールの代替楽器として貧困層に受け入れられていったこと、また、権威を持たない楽器である

がゆえに、電子的装置や高度な演奏技法を柔軟に取り入れていったために、今日では大衆音楽用楽器の花形として独自の地位を築くにいたった可能性を示唆した。

④インドネシアの大正琴

インドネシアの大正琴としてはロンボク島の事例が報告されていたが、梅田は本研究において、バリ島のタバナン県プジュンガン村

のノリン nolin（上)とカランガスム県アムラプラ周辺のプンティン penting（下）という二種の大正琴の存在を、外部の研究者として初めて確認した。梅田は各々の事例について、楽器製作および受容と伝承のプロセス、音楽的展開についての論考を発表するとともに、一部の写真・動画資料をネット上に公開した。バリ島および周辺の島には、この他にもいくつかの大正琴が存在する旨の情報が得られ、今後もさらに新たな事例の発見が期待

できる。

⑤ ①～④の研究結果を研究メンバーで共有し、一つの楽器の伝播と変容についての討論を重ねてきた。2010 年 12 月、日本音楽学会第 100 回中部支部例会において、シンポジウムを開催してその成果を発表し討論したが、大正琴誕生して百年の節目に当たる 2012 年を控え、本研究が初めて示した大正琴研究の展開の可能性と研究継続の重要性が再確認された。

(2)インドのリードオルガンとその異形に関する研究

岡田は、博士論文「インド鍵盤楽器考―楽器のグローカル化とローカル文化の再編―」以来、ヨーロッパで発明されインド風に改良されたハルモニウムに着目し、グローカル化とローカル文化の再編をキーワードに、伝統楽器や電子キーボードとの相克や、伝統音楽との関係に関する研究を展開した。特に大都市コルカタのハルモニウム製造に焦点を当て、他のデリーやムンバイなどの大都市のハルモニウム生産との違いを、楽器構造や歴史的背景、立地や人的条件など、さまざまな角度から検証する論考を発表した。さらに動画資料「デリー製ハルモニウムの製作工程」を作成し、Web 上に公開した。

(3)ヨーロッパの楽器学と楽器制作の現状に関する研究

①筒井は、ヨーロッパにおける鍵盤楽器関係職人やメーカー、楽器学関連団体および施設等に関する情報を収集・整理し、包括的な把握に努めると共にその情報の一部を Web 上にアップした。また、西アジアや東南アジアにおいて現地化されたピアノの異形についての報告も行った。

②横井は、田中と共に、2003 年に予備的に行ったハンガリーのブダペスト、オーストリアのウィーンを含む地域での調査結果を踏まえ、さらにイギリス、ドイツ、ベルギー等で、楽器職人や楽器メーカー、楽器博物館や楽器店などを対象にインタヴュー調査や情報収集を行った。特にイギリスではリードオルガンのコレクションと植民地であった南アジアとの関係に関する調査を行った。横井は、それらの調査から得られた情報の一部を、写真と共に啓蒙的な雑誌記事として著した。

さらに、旧東ドイツのザクセンとチェコのボヘミアにまたがる楽器製作拠点の一つフォークトラント地方に注目し、楽器産業の盛衰の歴史的経緯を、体制変換や地域復興、音楽的嗜好の変化、わざ学伝承のための人材育成など、多角的角度から検証する論文を提出した。

(4)19 世紀末インド楽器をめぐる東西楽器交流史に関する研究

1870 年代にインド人音楽学者 S.M.タゴールがインド楽器と音楽書を欧米各国に贈ったこと、とりわけベルギーに贈られた百点近くの楽器の管理にあたった V.C.マイヨンが、それを機に今日の楽器学でよく使用される四綱分類法を考案した事跡は有名である。しかし、これまで日本に贈られたインド楽器に関する詳細は不明であった。本研究によるインドと日本国内における継続的調査の結果、明治 10 年(1877 年)に明治政府に献呈された３点のインド楽器が、今日、東京国立博物館に所蔵されていることが明らかとなり、実際にそれらの楽器を閲覧して諸事実を確認するに至った。塚原は、それらの楽器の詳細と共に、その歴史的経緯に関する研究結果をまとめた論考を発表した。

以上(1)～(4)により、モノとしての楽器にこめられたわざ学とその変容から、音楽とそれを取り巻く諸要因の影響関係を、グローバルに動態として読み取るという本研究の当初の目的には、一応の成果を得られたといえよう。今後は本研究により浮き彫りとなった多くの新たな課題を、さらに詳細に研究してゆく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 梅田英春「バリにもたらされた大正琴―タバナン県プジュンガン村のノリン」『ムーサ　沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』査読無、第 11 号、2010.3、pp.71-83

② 梅田英春「バリにもたらされた大正琴―カランガスム県アムラプラ周辺のプンティン」『ムーサ　沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』査読無、第 12 号、2011.3、pp.53-64

③ 筒井はる香「パンメロディコンとその音楽―19 世紀前半における鍵盤楽器文化再考」『阪大音楽学報』、査読無、第８号、大阪大学文学部・大学院文学研究科音楽学研究室、2010.3、pp. 137-150

④ 横井雅子「フォークトラントの楽器制作の現在」『桐朋芸術短期大学紀要』、査読無、第７号、2011、pp.1-11

⑤ 岡田恵美　「コルカタのハルモニウム産業にみる都市性」　『東京芸術大学音楽学部紀要』査読有、第 36 号、2011.3、pp. 21-36

〔学会発表〕（計２件）

① 岡田恵美、映像発表「コルカタのハルモニウム製作にみる都市性」（東洋音楽学会第 61 回大会、2010 年 11 月 14 日、東京学芸大学）

② 金子敦子（司会兼パネリスト）、尾高暁子・田中多佳子・梅田英春（パネリスト）、シンポジウム「楽器の伝播とグローカリゼーション―大正琴の場合」（第 100 回日本音楽学会中部支部例会、2010 年 12 月 11 日、名古屋芸術大学）

〔図書〕（計２件）

① 塚原康子
「明治 10 年 S.M.タゴールが日本に寄贈したインド楽器と音楽書」『音の万華鏡　音楽学論叢』岩田書院　2010 年７月　305-326

② 田中多佳子
「（仮題）インド音楽の世界―楽器にみる人々のこだわり」『南アジアの文化と社会を読み解く』東アジア研究所編集、慶応大学出版会、2011 年 10 月（刊行予定）

〔その他〕

(1)雑誌記事

① 横井雅子「ロンドンの移民の街から（人はみな歌い、踊る 16）」『あんさんぶる』2008 年７月号（通巻 491 号）カワイ音楽教育振興会　20-21

② 横井雅子「今どきの匠たちの工房 から（人はみな歌い、踊る 17）」『あんさんぶる』2008 年９月号（通巻 492 号）カワイ音楽教育振興会　20-21

③ 横井雅子「楽器つくりの小さな町から（人はみな歌い、踊る　24）」『あんさんぶる』2009 年 11 月号（通巻 499 号）カワイ音楽教育振興会　20-21

(2)動画資料

「大正琴の製造過程とわざ」
「デリー製ハルモニウムの製作工程」
「シタールの製造過程」　　など

(3)ホームページ

http://www.kyokyo-u.ac.jp/ongaku/tanaka/kaken/

３年次の 12 月に開設・公開開始。研究の概要、研究メンバー、研究活動、研究成果、関連資料、関連リンクなどの項目別に本研究の全様を逐次掲載してきた。本研究の成果としての論文は全て pdf ファイル化して閲覧可能にし、制作した動画資料や収集した写真資料も解説付でネット上に公開した。

６．研究組織

(1)研究代表者

田中多佳子（TANAKA TAKAKO）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70346112

(2)研究分担者

梅田英春（UMEDA HIDEHARU）
沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：40316203
（H22：連携研究者）
金子敦子（KANEKO ATSUKO）
名古屋芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：90224592
（H21-H22：連携研究者）
沖花彰（OKIHANA AKIRA）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80115972

(3)連携研究者

尾高 暁子（ODAKA AKIKO）
東京芸術大学・音楽学部・講師
研究者番号：00397019
田中 健次（TANAKA KENJI）
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：10274565
塚原 康子（TSUKAHARA YASUKO）
東京芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：60202181
筒井 はる香（TSUTSUI HARUKA）
同志社女子大学・職員
研究者番号：-
寺田 吉孝（TERADA YOSHITAKA）
国立民族学博物館・准教授
研究者番号：00290924
横井 雅子（YOKOI MASAKO）
国立音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：00383688
岡田 恵美（OKADA EMI）
東京芸術大学・音楽学部・教育研究助手
研究者番号：60584216